

# 会員発表紹介

## 秋田大学医学部附属病院における抗菌薬使用届出制と 使用状況および分離菌について

- 加賀谷 英彰<sup>1)</sup>、福井 了三<sup>1)</sup>、伊藤 亘<sup>2)</sup>、小林 則子<sup>2)</sup>、植木 重治<sup>2)</sup>、  
竹田 正秀<sup>2)</sup>、富田 典子<sup>2)</sup>、萱場 広之<sup>2)</sup>、荏原 順一<sup>2)</sup>、鈴木 敏夫<sup>1)</sup>  
1)秋田大学医学部附属病院 薬剤部 2)同附属病院 感染制御チーム

【目的】 当院では2002年に感染制御チーム(ICT)が発足、抗菌薬使用マニュアル策定や抗MRSA薬・カルバペネム系薬の長期連用患者のチェックを行ってきた。2004年3月から抗MRSA薬処方理由書届出制を導入、カルバペネム系薬についても2005年12月から長期連用患者(7日以上)の使用理由書の届出制を導入し抗菌薬の適正使用に努めてきた。これらICTの取組みにより抗菌薬の使用量、耐性菌の分離状況、細菌の薬剤感受性がどのように経緯したのか検討した。

【方法】 2003年度から2007年度の各年度での注射用抗菌薬の使用動向を調査し、抗MRSA薬・カルバペネム系薬の使用量、長期連用患者数および耐性菌検出数、細菌の薬剤感受性変化の経緯に関して検討を行った。同時に塩酸バンコマイシン(VCM)のTDM実施状況の検討を行った。

【結果】 抗MRSA薬・カルバペネム系薬の使用量は2003年度と比較して各年度ともに減少が観察された。長期連用患者数は抗MRSA薬・カルバペネム系薬において2003年度と比較して減少が観察されたが近年増加傾向にある。細菌感受性変化については2003年から2005年にかけて耐性菌陽性患者数の減少および細菌感受性の改善が観察されたが、2005年から2007年にかけては感受性の悪化が観察された。VCMのTDM実施率は年々増加にあるが実施率は6割程度であった。

【考察】 ICT活動により抗菌薬の使用量・長期使用患者の減少、細菌感受性の改善を認めたが近年はやや増加が見られる。以上の事を踏まえ、TDM実施率の上昇など薬剤適正使用への更なる働きかけが必要と考える。

第 63 回 相互作用研究会 (平成 20 年 5 月 24・25 日)

## 秋田大学医学部附属病院における妊婦のサプリメント 使用実態と薬剤母乳移行性に関する認知度調査

- 菊地 尚子<sup>1)</sup>、三浦 昌朋<sup>1)</sup>、田中 俊誠<sup>2)</sup>、鈴木 敏夫<sup>1)</sup>  
秋田大学医学部附属病院 薬剤部<sup>1)</sup>、生殖発達医学講座産婦人科学分野<sup>2)</sup>

【目的】 現在、妊婦は自分の意のままサプリメントを自由に摂取できる社会的環境下にあるが、妊婦や出産後の女性は薬剤師と接する機会が少なく、薬剤やサプリメントに関する適切な情報を得る機会が乏しい。そこで、妊婦・授乳婦のサプリメントの摂取状況、および薬剤の母乳移行性についての認知度を、当院産科病棟へ出産目的で入院した妊婦・授乳婦を対象に意識調査を行った。

【方法】 平成17年9月から平成18年8月までの1年間に秋田大学医学部附属病院産科病棟に  
出産目的で入院した妊婦141名、平均年齢(±SD) 31.3±4.7歳を対象に聴き取り調査を行  
った。

【結果】 妊娠を機にサプリメントの摂取を始めた女性は全体の22.0%であり、葉酸の摂取  
が最も多く、21.3%の妊婦に摂取が見られた。薬剤の母乳移行性については、42.6%の妊  
婦が「知らない」と回答した。

【考察】 今回の我々の調査によってサプリメントの使用実態と摂取内容および薬剤の母乳  
移行性についての認知度が明らかとなった。

今後、婦人の産科病棟における出産目的の入院期間を薬剤服用および管理に関する期間  
として薬剤師による指導を強化する必要があると考えられる。

第 63 回 相互作用研究会 (平成 20 年 5 月 24・25 日)

## 食道切除再建術後患者におけるランソプラゾールの体内動態の予測

○ 比内 雄大<sup>1)</sup>、三浦 昌朋<sup>1)</sup>、本山 悟<sup>2)</sup>、加賀谷 英彰<sup>1)</sup>、小川 純一<sup>2)</sup>、鈴木 敏夫<sup>1)</sup> 1 秋田大学医学部附属病院薬剤部 2 秋田大学医学部第二外科

【目的】食道癌術後患者は、逆流性食道炎を生じやすい。そのため、胃酸抑制を目的にプロトンポンプ阻害剤（PPI）を投与している。しかし、これまでに食道切除再建術後患者への空腸瘻からの投与におけるPPIの体内動態は検討されていない。そこで本研究では食道切除再建術後患者へのPPIの腸瘻からの投与による体内動態解析を目的とする。

【方法】秋田大学病院倫理委員会で承認を得た食道切除再建術後患者28名を対象として、ランソプラゾール30mgを空腸瘻から投与した。初回投与の4時間後に採血を行い、HPLC法を用いてR-及びS-ランソプラゾールの血中濃度を測定し、血中濃度比(R/S)を算出した。一方で、患者より得られた血液からゲノムDNAを抽出し、PCR-RFLP法を用いてCYP2C19の遺伝子多型を解析し、hom EM、het EM及びPMの3群に分類した。

【結果】対象患者28名のCYP2C19の遺伝子多型を解析した結果、hom EMが7名、het EMが15名、及びPMが6名であった。投与4時間後のランソプラゾールのR/S比はそれぞれhom EMで31.8、het EMで21.4及びPMで9.4であった。

【考察】先に我々が報告している健常人におけるランソプラゾール経口投与によるR/S比と腸瘻投与によるR/S比を比較すると、それぞれのR/S比において有意差は認められなかった。これより経口投与でも腸瘻投与でもほぼ同一の体内動態を示すことが推測された。また、健常人における先の報告と今回の研究で、ランソプラゾールのR/S比は服用4時間後においてhom EM、het EMおよびPMで明らかな違いが認められたことより、このR/S値からCYP2C19のフェノタイプを予測することが可能であると考えられた。

第63回 相互作用研究会（平成20年5月24・25日）